

5. 金沢大学における運動部離れについての研究

(代表者) 宮村 佑介 (教育学部スポーツ科学課程生活スポーツ学コース 4年)
岡本 昂丸 (教育学部スポーツ科学課程生活スポーツ学コース 4年)
小嶋 一正 (教育学部スポーツ科学課程生活スポーツ学コース 4年)
鈴木 仁子 (教育学部スポーツ科学課程生活スポーツ学コース 4年)
富沢 湖乃美 (教育学部スポーツ科学課程生活スポーツ学コース 4年)
保坂 翔 (教育学部スポーツ科学課程生活スポーツ学コース 4年)
安田 純也 (教育学部学校教育教員養成課程保健体育コース 4年)

指導教員

大久保 英哲 (人間社会研究域学校教育系)

1. 背景と研究目的

運動部に参加し、競技スポーツに打ち込むことによって得るものは大きい。厳しい環境の中で、共に切磋琢磨することによって生まれる人間関係。身体と心で、自己の限界に常に挑戦するという経験。普段の生活ではないような、スポーツの場面ならではの感動。大学運動部は、学生が社会に出る前にそれらのものを得ることができる最後の場である。金沢大学においても運動部に所属し、充実したスポーツライフを送る学生を少しでも増やしたいと思ったのが本研究に取り組んだ動機である。

しかし本田ら¹⁾によると、「近年、大学における組織化された体育系運動部への入部者の減少の問題が深刻化しており、運動部によってはチームが組めず、スポーツ競技会への参加を断念せざるを得ない状況に追い込まれているところもある」と述べられている。金沢大学で梶²⁾によって昭和47年度から平成3年度、薬師³⁾によって平成4年度から13年度までの運動部参加学生数の推移が調べられている。それによると全学生数に対する参加学生の割合(注1)が昭和47年度から平成13年度まで4.61%減少している。たしかに、このことからすれば金沢大学でも運動部離れは生じてきた。では平成13年度から平成20年度にいたるまでも金沢大学における運動部離れはおこっているのか。また金沢大学の運動部員は現在、どのような動機・目的で運動部に所属しているのかを調査した。

2. 研究方法

①「金沢大学概要」(注2)で金沢大学の全学生数を調べ、「学生団体結成届け」(注3)をもとに、平成15年度から平成20年度までの部活動の部員数を明らかにした。平成4年度から平成13年度までの全学生数、部員数は薬師の研究で調べられたものを使った。ただし、平成14年度、16年度の書類は見あたらなかったため、本研究では対象にできなかった。

②金沢大学運動部員の運動部への参加動機を調査した。全41の運動部を対象に、研究室のメンバーで部の代表者に連絡をとり、調査を依頼し、質問紙を配布した。回収は、角間キャンパス学生会館2階事務室に回収BOXを設置し、そこに期間内に提出してくれるよう依頼した。実施期間は1月29日から2月20日までの約3週間。連絡のとれない運動部もあったこと、実施期間中、練習がオフの運動部もあり、多くの回答者を得ることができなかったことが調査の不十分だった点である。35の運動部に質問紙を配布し、274人回収でき、回収率は28.6パーセントだった。

質問紙の構成と質問項目、質問紙の構成は、蔵本・菊池⁴⁾が用いたものを参考に、教育学部スポーツ科学課程4年、15人にプレテストを行い、修正等を加えた。蔵本・菊池の研究では〔親和〕〔自由〕〔健康・体力〕〔達成〕〔回避〕

〔固執〕〔社会的有用性〕の7つの因子を、運動部への所属動機と関連あるものとして扱っていたが、本研究ではさらに〔人格形成〕〔自己の満足感〕と命名した因子を新たに加えた。各因子を構成している項目は全部で37。また、「1」そう思わない、「2」どちらかというと思わない、「3」どちらともいえない、「4」どちらかというと思う、「5」そう思う、の5段階で測定し、それぞれ1、2、3、4、5、の得点を与えて数量化を行い、間隔尺度を構成するものと仮定した。そして項目別、因子別に得点の平均値を比較した。なお得点値は小数第3位を四捨五入した。

3. 研究成果と考察

結果①

運動部離れを検証するうえで、運動部参加学生数より、参加学生割合を重要視した。それは金沢大学の全学生数が年毎によって増減しているためである。また図1、図2は表1をグラフ化したものである。運動部参加学生数は平成4年度(1,272人)から平成13年度(1,144人)まで128人減少した(表1参照)。また平成15年度が1,126人、平成17年度が1,148人、平成18年度が1,152人、とゆるやかな上昇をみせていたが平成19年度は1,068人と、過去15年間で最小となった。そして平成13年度から平成20年度は70人減少した。運動部参加学生割合は平成4年度から平成13年度まで2.89%減少していた。また平成13年度から平成20年度は0.18%の減少だった。平成20年から過去15年の期間で運動部参加学生数、参加学生割合をみた場合、運動部離れを指摘することができる。しかし過去7年の期間でみると、減少は微々たるものと判断できるので、運動部離れは歯止めがかかったとみることができる。

表1 運動部参加学生数の推移

	H4	H5	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H15	H17	H18	H19	H20
参加学生数	1,272	1,269	1,274	1,167	1,133	1,209	1,146	1,078	1,144	1,126	1,148	1,152	1,068	1,074
全学生数	7,718	7,855	7,983	8,102	8,189	8,443	8,584	8,520	8,418	8,326	8,217	8,176	8,057	8,007
参加学生割合(%)	16.48	16.16	15.96	14.40	13.84	14.32	13.35	12.65	13.59	13.52	13.97	14.09	13.26	13.41

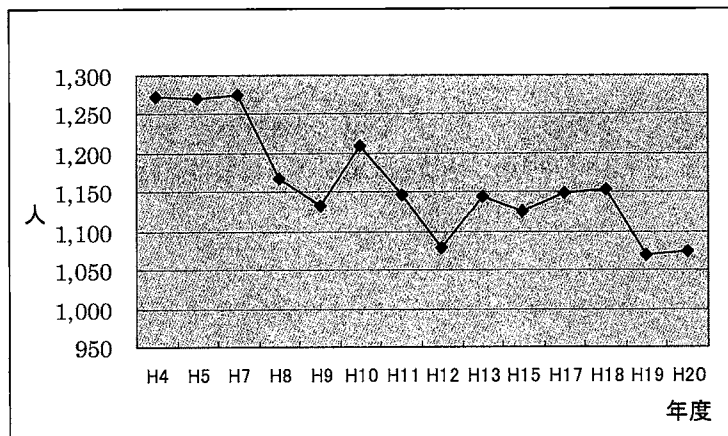


図1 運動部参加学生数

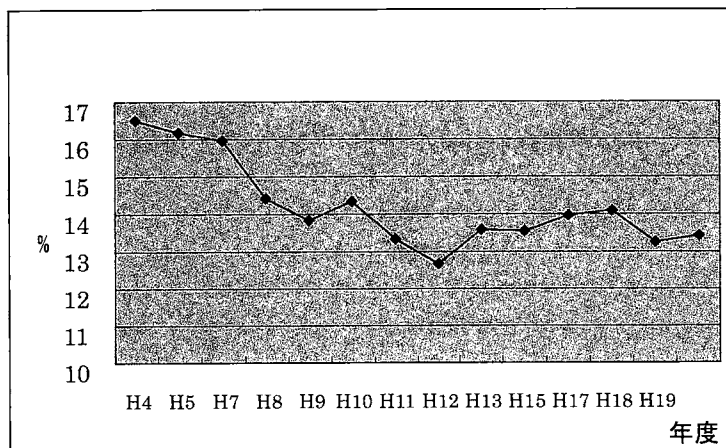


図2 運動部参加学生割合

結果②

運動部員の運動部への参加動機で、項目別得点順位を表2に示す。1位は「自分がやっている競技が好きだから」だった。自分の専門の競技が純粋に好きで、運動部でそれを日々行っているという姿がうかがわれる。そして2位、3位と「親和」が占めた。下位はやめたくてもやめられないという理由で部に所属する「回避」が目立った。また32位から金沢大学の運動部員は、部に厳しさを求め、競技に取り組んでいると考えることができる。35位からは、自分の中に価値を見出し、スポーツに取り組んでいると考えられる。37位からは金沢大学ではプロを目指す人、体育教師を目指す人、スポーツ関係の職業につきたい人以外が多数であることや、将来の便益のために運動部に参加している意識は極めて低いと予想される。

1.	自分がやっている競技が好きだから〔自己の満足感〕	4.39
2.	所属している部が好きだから〔親和〕	4.35
3.	仲間と楽しくスポーツができるから〔親和〕	4.24
4.	他人にはできないような感動、経験がしたいから〔自己の満足感〕	4.17
5.	競技を楽しむために少しでもうまくなりたいから〔達成〕	4.17
6.	続けていると多くの仲間ができるから〔親和〕	4.11
7.	何かに打ち込んでいきたいから〔自己の満足感〕	4.10
8.	今後も自分の技術や記録が向上するという望みがあるから〔達成〕	4.00
9.	勝利を体験したいから〔達成〕	3.99
10.	部活動を通しての体験が実社会にでて役立つと思うから〔社会的有用性〕	3.97
11.	試合、練習が好きだから〔自己の満足感〕	3.92
12.	部を通じて一生涯の仲間を得たいから〔親和〕	3.88
13.	厳しい環境の中で精神的に鍛えられるから〔人格形成〕	3.84
14.	健康の維持・増進のために運動したいから〔健康・体力〕	3.78
15.	日常生活でたまったストレスを発散させたいから〔健康・体力〕	3.77
16.	最期まで続けたという満足感を味わいたいから〔固執〕	3.77
17.	常に体を動かしていきたいから〔健康・体力〕	3.76
18.	部での活動を通して自分に自信が持てるようになるから〔人格形成〕	3.75
19.	日常生活で困ったときに助けてくれる仲間がいるから〔親和〕	3.74
20.	体力をつけるために運動したいから〔健康・体力〕	3.71
21.	誰もが平等に練習できるから〔自由〕	3.55
22.	レギュラーの座を取りたいから、あるいはずっとレギュラーでいたいから〔達成〕	3.52
23.	度胸がつけられるから〔人格形成〕	3.48
24.	今の自分を理想の自分に近づけることができるから〔人格形成〕	3.42
25.	部を最期まで続けることが目標だから〔固執〕	3.27
26.	練習をおしつけられず、自主的に取り組めるから〔自由〕	3.16
27.	部の雰囲気的自由だから〔自由〕	3.07
28.	やめたという挫折感を味わいたくないから〔固執〕	3.01
29.	やめると今まで一生懸命やってきたことが無駄になるから〔回避〕	2.99
30.	部に所属していると、就職に有利だから〔社会的有用性〕	2.80
31.	やめると何をしていたかわからなくなりそうで不安だから〔回避〕	2.78
32.	厳しい規則がなく、楽しく運動が出来るから〔自由〕	2.72
33.	やめると仲間との関係が悪くなるから〔回避〕	2.72
34.	やめると身をおく場所がなくなるから〔回避〕	2.53
35.	成功して有名になりたいから〔達成〕	2.52
36.	やめると他人に意志の弱い人間だと思われそうで嫌だから〔回避〕	2.43
37.	将来、スポーツに関わる職業に就きたいから〔社会的有用性〕	2.39
	全項目の平均値	3.49

表2 「運動部への参加動機」項目別得点順位

運動部員の運動部への参加動機で、因子別得点の順位を表3に示す。1位はプレテストの意見によって新たに作られた[自己の満足感]の因子が一番得点を集めた。競技そのものが好きだから、感動・貴重な経験をしたいからという自己の満足感を満たすことが理由として非常に優位であることが考えられる。また[親和]が2位であることから金沢大学の学生は運動部所属の目的として、人間関係の維持・拡大に重きを置いている、と考えられる。また9位の[回避]が最下位であることから、やめたくてもやめられないから所属しているのだ、とする理由は決して優位になり得ないと思われる。蔵本・菊池の研究では[社会的有用性]が1位であり、本研究では8位であることから金沢大学の学生はスポーツで得られる便益、有用性を重要視していないことが考えられる。

1	[自己の満足感]	4.15
2	[親和]	4.07
3	[健康・体力]	3.76
4	[達成]	3.64
5	[人格形成]	3.62
6	[固執]	3.35
7	[自由]	3.12
8	[社会的有用性]	3.05
9	[回避]	2.69

表3 「運動部への参加動機」因子別得点順位

4. 結論

平成13年度以前、運動部離れはおこっていたが、平成13年度から平成20年度において、運動部参加学生割合の減少が底をうち、運動部離れはひとまず歯止めがかかっている。

因子別得点順位では、競技そのものが好きだから、感動・貴重な経験をしたいからという自己の満足感を満たすことを理由とする「自己の満足感」が1位だった。[親和]が2位で得点が1位と近いことから、金沢大学の学生は運動部に所属することで、人間関係を充実させることを目指すことに重きを置いていると考えられる。蔵本・菊池の研究では[社会的有用性]が1位であり、本研究では8位であることから金沢大学の学生はスポーツで得られる便益、有用性をさほど重要視していないことが考えられる。

5. 最後に

運動部離れがおこってきた原因はいくつか考えられる。大学生生活で部活動より学業やアルバイトに専念する学生が増えたことや、練習が厳しい、部の競技レベルが高い、遠征費などの出費が高い、サークルの方が気楽である、自由時間が少ない、と感じる学生が増えたことなどである。運動部に所属してスポーツをやっていくうえでは、確かにこれらのことを感じることもある。特に自由な時間を保障される大学生にとって、時間的拘束は大きなデメリットだ。しかしこれらのことを感じながらも所属し、活動する長所の方が大きいと感じるから運動部員は部に所属しているのだろう。大学運動部は一般の大学生が競技スポーツと向き合える最期の場合と言っても過言ではない。所属していない学生は各部の活動内容も魅力も分からない場合が多いので、各部が連携して部を紹介するイベントを開催するなどし

て、多くの学生に知ってもらふ必要があるだろう。

【参考文献】

1) 本田勝義 橋本公雄 本田由紀子 (2003) 「日本体育学会大会号」 『大学生の運動部離れ減少の原因究明に関する研究：学生生活観および自己鍛錬に対する価値観の視点から』

2) 梶 雅代 (1992) 『金沢大学における運動部活動参加学生数の推移に関する研究』

3) 葉師千春 (2001) 『金沢大学における運動部活動参加学生数の推移』

4) 蔵本健太 菊池秀夫 (2006) 「中京大学体育学論叢」 『大学生の組織スポーツへの参加動機に関する研究：体育会運動部とスポーツサークル活動参加者の比較』

中村 敏雄 (2006) 「現代スポーツ評論」『特集 変貌する大学スポーツ』

(注 1) 運動部参加学生割合 = 「運動部員 ÷ 全学生数 × 100」

(注 2) 金沢大学総務部総務課広報戦略室が発行したもので、金沢大学の全学生数、男女別学生数、学部別学生数、学年別学生数などが記載されている。記載されている学生数は各年度 5 月 1 日現在の学生現員。

(注 3) 学生が学内で結成した団体が大学に公認されるときに、金沢大学学務課学生係に提出するもので、代表者、構成員数、目的、内容などが書かれている。